座談会

「北斗の水くみ」写真展を中心に

インタビュー

職業としてテープ起こしを解き明かす

Work-Group Contrail 代表 中野寿子さんに聞く

http://w-contrail.net/

出席者：

石黒正紀、平井正則、平松秋子、堀内伸太郎、宮川幹平、伊津信之介（順不同・敬称略）

司会：これから「Contrail ひこうき雲」という団体でテープ起こしをされていて、むなかた電子博物館の座談会のテープもテキスト化していただいた中野寿子さんに、その方法を伺いたいと思います。具体的に、今、テープ起こしを、どういう形でされているのですか。

中野：現在、メンバーは 30 名近くいて、実働 10 名くらいで動いているのですけれども、メーリングリストというのを持っていて、音声を送っていただいたら、そこにこういう作業がありますので、何月何日までに作業してくださいと募集をかけるのです。そうすると、「私、30 分できます」「60 分できます」と手が挙がってきますので、その方の希望に応じた時間数に分けて、みんなに作業してもらうのです。戻ってきたら、私が最初から最後まで全部聞き直しをして、納品をするという流れで作業をしております。

司会：全く誤解しておりました。どういうふうに誤解をしていたかというと、宗像でやっていると聞いたので、中野さん１人でやっていて、大して人数はいないだろうと。すごいタイピングの速い人だなと思っていたのですけれども、10 人に分かれたら 100 分でも 10 分に、長くても 30 分ですね。

中野：大体１本の案件を、３人か４人くらいでします。２時間だったら多くて４人、少ないときは２人くらいで作業してしまいます。

司会：そうすると、今、コンピューターのプログラムなんかも、オープンソースという誰もが参加できるものだと、みんな手分けをして、少ない量で仕事するというのは。

中野：ただ、テープ起こしでも何でもそうですけれど、セキュリティとか、守秘義務が発生しますので、データのやり取りは、サーバーを使って、誰もがアクセスできないようにパスワードを設定してセキュリティをかけています。あと、頂いた音声は、納品したらすぐ消去という、その辺の守秘義務契約書というのをきちんと結んでやっています。

司会：中野さんたちは、もともとそういう仕事をずっとされている集団なのですか。

中野：いえ、私は、もともと医療事務で病院で働いていたのですけれども、何か自分で手に職を付けたいというのと、パソコンが好きだったので、それで何かできないかなとずっと思っていたのです。15 年くらい前ですが、テープ起こしという仕事がありますよというのを聞いて、いろいろ講習を受けたり、勉強会に参加したりしました。でも、通信教育の勉強というのは、実際には役に立たないのです。自分たちで営業しようとか、何かしようとしたとき、全然、そういう細かなところは教えてくれないので、テープ起こしオンライン講座で、実践でのテープ起こしのやり方や営業の仕方、ホームページの作り方、名刺の作り方、あいさつの仕方など全部教えてもらって、やっと、この「ひこうき雲」というのをやろうという形で、自分１人で最初は立ち上げたのです。

でも、１人では、結局、クライアントは不安なのですね。ネットで、私１人でやっていますと、ホームページを立ち上げても、どこの者かも分からないので、全然仕事が来ないのです。せいぜい１カ月に１本来ればいいほうでした。

ちょうどそのころ、宗像市が SOHO というのをバックアップし始めて、第１期生の面接があったのですね。そして、宗像 SOHO の第１期生として、宗像市の仕事をさせていただいていたのです。

同時期に、何かいい方法、クライアントが喜ぶ方法は何だろうか、クライアントが一番不安なのは何だろうか、それを解消するにはどうしたらいいのだろうかということで、グループというのを考えたのです。大量案件でも、１人が病気になっても、メンバーの誰かが作業ができるから穴を開けることもないし、１人だったら不安だけど、グループですると クライアントはきっと安心もするのではないかなというので、４月に、一緒に勉強した仲間に声をかけて、３人でまず初めに立ち上げました。ホームページも自分たちで作って立ち

上げたら、すぐに大量にどんと来たのです。「ええ！」と、本当にそのときは個人でやることと、みんなでやることの、この違いの大きさというのをつくづく感じました。

それから、どんどん毎年毎年、案件が多くなって、会社のほうからも依頼が来るようになって、おかげさまで、今はもう本当に忙しい毎日ですね。

司会：そのオンライン講座というのは有料のものですか。

中野：もちろん、どのくらいだったか覚えていないのですけれども、それほど高くはなかったですね。すごく安くて、１万円前後だったと思います。

司会：そのオンライン講座にたどり着いたというのは、誰かの紹介ですか。

中野：ネットです。ただひたすらネットで、私は何をしたらいいんだろう、どうにかしたいという、ただその一念ですね。テープ起こしとかで検索をかけていたら、オンライン講座というのを見つけて、ただ、私が見つけたときにはもう１期生募集が終わっていたので、秋から始まる２期生に、すぐ応募しました。

司会：ほかの委員で、何か聞いてみたいことありますか。

宮川：以前、ソフト的にそういった音声認識して、テキストに起こすようなツールを使ったことがあるのですけれども、もちろん基本的なところは、だいぶ質も上がってきたかなという感じはするのですが、実際、人を入れてテープを起こされると。こういった座談会等をテープ起こされたときに、言葉の中に、いらないというか、テキストに起こすべきかどうか判断を迷うところもあるのではないかと思います。そのあたりはどうされているのですか。

司会：あのーとか、えーといった「けば」は全部取るようにはしています。また、会議録などは、そのまま起こすと意味が通らない文章になるので、最近は、意味が通るように整理してくださいという依頼が多いです。ただ、インタビューとかは、そのときの雰囲気もあるので、そのままでいいですと言われることはあります。

宮川：グループでされるときも、素起こしの状態ではなく意味を通すようにと言われたら、それぞれの担当の方が、そういうふうに起こして戻されるということですか。

中野：一応、ここの会議はこういう起こし方をしてくださいという指示をしますが、統一をさせないとおかしいので、最後に私が全体を通して統一させています。

平井：会社ですか。

中野：今は個人事業主という形で登録しています。

平井：ある程度、グループの方々にペイしている。

中野：そうですね。あと、みんな宗像ではないので、営業的なことは全部私がやっています。近くにいる人といったら５、６人です。あとは県外で、遠い所では東京の人もいます。

石黒：競合している会社、ソフト会社みたいなもあるのですよね。

中野：すごく多いですね。

司会：すごく多いですよね。むなかた電子博物館のテープ起こしを、ネットで検索したら、だっと大手が上から出てくるんです。そこに最初頼んだのです。それで今回、中野さんにたどり着いたのは、宗像 SOHO の上野さんから、宗像にもちゃんとそういう人がいるよというので紹介してもらったのです。ですから、ネットだけでたどり着くのと、そうじゃないルートというのもあるなというのは思いました。

石黒：仕事はたくさんということは、需要が非常に多いということになるのですか。

中野：そうですね。先ほど言われていたように、音声認識が普及してくると仕事がなくなるのではないかとよく言われたのですけれども、そうでもないみたいで、結構、多いですね。要約してくれというのも結構出ています。

司会：多分、今まで編集と言っていた、文章として読めるようにするリライトまでされているのですよね。会議をやっても、記録を取る人がきちんとしていれば、記録はきちんと残るけれども、そうではない人がした場合には、会議の記録というのはあまり残らないから、結局、テープ起こしをして、それで速度が速ければ、３日そこらで出てくれば、自分の企業内で会議録を作るよりも、よっぽど早いですよね。

中野：そうですね。翌日納品というのをうたっていると、結構、市町村関係でもそういうニーズが多いですね。依頼があれば録音にも行っているのですけれど、話者をメモして帰って、みんなに当日か翌朝までに起こしてもらって、私が聞き直しして、朝一とか午前中に納品すると喜んでいただけるのです。でも、私たちは大変ですけれどね。

平松：自分の専門分野ではない会議ですよね。歴史の会議などを録音したものを、テープ起こしをする場合に、知識が無くて、その会話の中だけで聞き取って文字にする。これは大変難しいと思うのです。そういうときには、どういうことに気を付けていらっしゃるのですか。

中野：まず、そういう専門的なテープ起こしをするときは、できれば資料を多めにくださいとお願いします。でも、質疑応答になると、その資料に載っていない言葉が結構出てくるのです。人は、聞いたことのある言葉はすっと耳に入ってくるのですけれども、聞いたことのない言葉に対しては何度聞いても聞き取れないのです。音声はつながっているので、人の話の中で切り方を間違ったら、全然違う聞こえ方になってしまうのです。

今のプレーヤーは、音の速度を変えてもちゃんと普通の声で聞こえるのです。速くして聞くと、いらない音が消えて聞こえてくることがありますし、遅くして聞くと、言葉の一つ一つが聞こえてくるのですね。そうすると、その中からヒントが出てきますので、あとはそこから連想しながら、関連する言葉を入れてネットで検索します。それでもどうしても分からないときは、括弧して不明で、その時間を入れて、申し訳ございません、調べましても分かりませんでしたということで、納品させてもらっています。

司会：謎が解けました。聞いていて、ほとんど音と同じ速度で入力できるすごい人たちがやっているのかなと思ったのですけれども、速度は速いのでしょう。

中野：打つ速度は、みんな結構速いと思いますけれども、私たちが使っているテープ起こし用のプレーヤーは手でストップと再生ができるのです。そして、ストップしたときに、何秒か前に戻るというリピート機能が付いていて、前の音とのつながりを確認しながら次を起こすことができるプレーヤーを、テープ起こしをする人たちのために無料で作ってくれている人がいて、そういうのが幾つかあるのです。

司会：それは、ソフトウエアとしてのプレーヤーですか。

中野：はい、そうです。

司会：コンピューター上でテープも聞いて、入力もするということですか。

中野：はい、そうです。それで、だいぶスピードも速くなりますし、足でスタートとかストップを操作するのもあるので、今はもう、テープ起こしをするには、すごくやりやすい環境にあると思います。

平井：商売というか、競争するわけですよね。お宅のメリットというのはどこにあるのですか。

中野：そうですね……クライアント様のご要望に応じた納品原稿を納める。それをするために、みんなで一生懸命聞き直しをしています。何て言ったらいいのですか、精度の高い、喜んでもらえるような原稿を納める。それと、決められた納期にきちんと納品する。

石黒：安いからとか。

中野：いえ、そんなに安くはしていません。私がテープ起こしを勉強したときに、仕事を取りたいからといって単価を下げる。それはやめるべきだと。自分たちのプライドをしっかり持って、単価を 200 円なら 200 円と決めたのだったら、それに見合う納品原稿にするべきだとオンライン講座で習ったのです。私もそれを 15 年間守ってやっています。

確かに今、１分単価 60 円とか 70 円という所や 140 円という所もあります。もう本当にさまざまですけれども、質を伴って納品させていただいていると、私は思っています。

石黒：会社と民間とどちらが多いですか。

中野：どうでしょう。会社が結構多いと思います。個人事業主でやっている人はいますけれども、ほとんどがどこかに入ってやっていたりするのです。自分で営業に走っていってということは、あまりされていないと思います。

石黒：質ということは、単純にＡとＢを比べて、これがいいですよではなくて、ユーザーに対して質的に保障するということだろうから、一概には、質といってもいろいろあるのでしょうけれども。

中野：リピートがあるということが、満足していただいたのかなと。リピートがないときは、何か私たちに悪いところがあったというか、満足していただけなかったと。

石黒：お金が無いからこなかったということも、それも踏まえて。

中野：それは分からないですけれども、大体、リピートしていただいたというときは、喜んでいただいたんだなと思っています。リピートがないときは、どこが悪かったのだろうかなということで、ちょっと勉強しなきゃねとなります。

クライアント様のほうから、いろいろな注文をつけてくださることもあります。それが私たちのレベルアップの……

石黒：勉強になっているのね。

中野：そうですね。こうしてください、ああしてくださいと言っていただくと、すごく勉強になりますし、では、そのためにはどうしたらいいか、私たちも考えますので。

石黒：聞いてくれているグループの人たちの研修というか、勉強会というのはされているのですか。

中野：忙しい時期はできないのですけれども、この４月、５月、６月というのは、官公庁がまだ動きがないから仕事が減るのです。この時期に、スカイプを使って勉強会をやっています。

石黒：すごいな。

中野：みんな集まってできればいいのですけれども、遠いし、主婦だったり、昼間仕事をしていて夜、先々、自分に力を付けたいからということで勉強している人もいるからですね。スカイプを使って、参加できるときに勉強するという形でやっています。

石黒：代表がやっぱりノウハウを持っているのだな。

司会：むなかた電子博物館として、非常に刺激を受けるお話だったと思います。こういう形で、むなかた電子博物館の座談会や、あるいは講演会が紀要の原稿になっていくということが理解できました。

本当に、今日は忙しい中、おいでいただきましてありがとうございました。

中野：いえ、呼んでいただきまして、ありがとうございます。